

壊れたものを癒すミニスタリング

— fsy 2022 特別セッションを開催 —

リアホナスタッフライター
こばやし ひまこ
小林 久子

200人が参加する、2泊3日の全国イベントを企画から実施までたった1か月あまりで行う——そんなことが可能だろうか。

「奇跡の連続でした」と語り草になっている fsy^{*1} 2022 特別セッション。一体どのような経緯で実現したのか。

問題が起こった瞬間に解決していく

fsy2022では、慎重な感染対策にもかかわらず、全国3会場それぞれに若干の新型コロナウイルス感染者と途中帰還者があった。文字通り涙を流して会場を後にした彼らを、アジア北地域会長の和田貴志長老がいたく心配し、まだ fsy 真っ最中の8月11日、「その子たちをケアしてほしい」と、第二顧問のジョン・A・マキューン長老に電話したのが全ての発端だった。

会場で早速、全国委員会と地域七十人が相談する。「fsyの傷はfsyでしか癒せないんじゃないか……」来年の春か夏に特別セッションを開催しては？ いや、高3の子は卒業してしまっている。9月のYSAカンファレンス^{*2}と抱き合わせ開催では？ 宿泊枠が足りない……。ふとカレンダーを見ると、YSAカンファレンスの前の週にも3連休がある。わずか1か月後だし、人気の施設だし……。諦め半分で東京会場、国立オリンピック記念青少年総合センターの予約状況を確認すると——150枠ほど空いている！ 奇跡的なことだった。その晩に徹夜で企画書を作り、翌12日にマキューン長老へ見せる。「これはいける！」仮予約をし、地域会長会に提案した。



特別セッション・フィナーレ

この企画は愛知・美浜セッションがまだ開催されていた8月16日(火)に正式決定する。翌17日に予約確定、18日に神権指導者への手紙で発表。ウェブサイト、オンライン申込フォーム、ポスターなどを揃えて20日から応募受付を開始する。

会場も問題だった。8月17日の予約時点では、体育館や大ホールなどの主要施設はすべて埋まっていた。教室やリハーサル室といった狭い部屋でプログラムを行わざるを得ないのか……。ところが、20日に再度ウェブサイトをチェックした全国委員が、17日には埋まっていたレセプションホールが空いていることに気づく。特別セッション委員会のメンバーは語る。「飲食も運動もダンスもできて、セミナーもできるのはここだけ。すべてのニーズを満たした完璧な場所だったんですよ。これもまた奇跡でした。」

応募締切まではわずか15日。60人参加は何とか達成したい。一体どれだけの青少年が応募してくれるのか——締切の数日前には30人から40人。ところが締切直前、駆け込みエントリーで100人以上に達し、嬉しい悲鳴が上がった。指導者と合わせて200人規模のイベントとなる。

プログラム面の準備には全国から、8月のfsyで経験を積んだYSAコーディネーターとカウンセラーたちが奉仕の手を挙げてくれた。わずか1か月で準備できたの

は、全国3セッションの最良のノウハウを持ち寄ったからだ。彼らを有機的に連携させるべく、8月の各セッションディレクターたち3組も集結した。

参加者の蓋を開けてみると、fsyを途中帰宅した子たちが11%。体調不良などで直前キャンセルになった子たちが43%。部活など様々な理由で8月に申し込まなかった子たちが25%——これには障がい等で長期のプログラムに参加できない子も含まれる。残りは友達の手伝いで参加した子たち。一人で参加する勇気がない子のミニスタリングのために来ていたのである。彼らがいなかったら会場が冷たい。彼らがいなかったら会場が温まった。全国委員会のメンバーは言う。「初日、すごく不安だったけど、集まった子たちを見て驚いた——この雰囲気は、普通のfsyだと、仲間との友情がぐっと深まる3日目あたりですよ。」

こうして9月17日から2泊3日、文字通り「特別」なfsyがスタートしたのである。

永遠の目的を、永遠の目で見る

2日目の安息日、聖餐会に引き続き、アジア北地域会長の和田貴志長老と直美姉妹によるディボーショナル^{*3}が行われた。直美姉妹は、かつて大勢の兵に包囲されたのを恐れてエリシャのもとにきた若者について語った。「エリシャは若者の目が開くようにと祈りました。すると、若者に主の軍勢が見えて、自分たちを包囲した兵よりもはるかに多いことを知ったのです。皆さんも、信仰の目で見るときに、見えなかったものが見えるようになります。」^{*4}

※1— 青少年の強さのために (For the Strength of Youth) と題する、中2から高3を対象とした、教会の宿泊教育プログラム

※2— 9月23日から25日にかけて、同じオリンピックセンターで600人規模のヤングシングルアダルト (YSA) カンファレンス東京セッションが予定されていた

※3— 神への信仰を思い巡らす集まり
※4— 列王紀下6:15-17参照



直美姉妹がバプテスマを受けたいと言ったとき、神道の神官だった父親は猛反対をした。直美姉妹は後に、父親が、「娘が教会に入ることを許さなければならない」と強く感じる経験をしていたことを知る。「わたしには証拠があるので、神様がまた助けてくださるという望みを持って人生を歩み続けています。永遠を見る目を持つには、振り返ること、前を見ることの二つが必要です。」永遠の目で見ると、人生を力強く歩めると証した。

和田長老は、「これまで親から10数年間聴いてきたことを、肯定するのか、否定するのか、今決めてください」と青少年に投げかける。「作用される者」ではなく、自らの選択によって「作用する者」※5になってほしいとの願いからだ。人生の道は常に二つに分かれていることを示し、「なすべきことをすべて示してくださる聖霊に頼ってください」と繰り返す。

「今、皆さんにはどういう試練がありますか？ 今どんな選択、決断をしなければなりませんか？」人を赦すか赦さないか、スマホをいつまでも見るか見ないか、伝道に出るか出ないか……。 「イエス・キリストは、狭い門から入りなさいと言われました。狭い門から入るとは、人が通らない道を通ることです。」和田長老は、容易でない道を選ぶことが、その後の人生、永遠に大きな違いを生むと教える。

そして、放蕩息子のたとえ話※6を一節ずつひも解いていった。「本心に立ち返るとはどういう意味ですか？ 息子は財産を使い果たした後、絶望したと思います。その後、飢饉が起り、豚の食べるいなご豆ももらえなかった。息子は、『自分は何者か、自分は何をやっているんだろう』と考えたと思います。これは悔い改めの始まりです。欲求を満たす生活から、立ち

直ろうという気持ちになったのです。そして、赦してもらえないかもしれないけど、父を信頼して、家に帰ることを選択しました。作用される者から作用する者になろうと決めたのです。選択は1回だけではありませんでした。小さい選択を重ねて、息子は家に帰ったのです。」次いで、父に目を向けさせる。「父は、息子がいつか心細い思いで帰ってくるのを待っていました。父には赦さないという選択肢もありました。でも、遠くにいたのに、走り寄って、息子を抱きしめました。『やっと帰ってきたか。おまえは家族を台無しにした』とパチンと叩いたら息子を失っていたと思います。息子も選択したけれど、父も選択したのです。」広い会場が静まり返る。「この聖句をお父さんと読んでね。」和田長老の父親のような眼差しが青少年を包む。

御心を尋ね求めました

会場では多くの青少年が、どのように信仰を使って「fsy2022 特別セッション」に至ったかを語った。

8月のfsy 4日目に濃厚接触者として帰宅を余儀なくされた藤谷良哉兄弟(高3)は、最初は苦しみ、泣いたりもしたが、祈り求め、聖文や指導者からも慰めを得た。「父親が、これまでの人生で理不尽だと感じた経験をどのように考え、対処してきたかを話してくれたんです。」初めて知る苦闘と向き合った父の信仰——心に響き、祈り続けることで完全な平安を取り戻した。最終的には「主の御心でなければこういうことは起きない」と受けとめ、「行きたくても行けなかった人に参加できる道が開かれたことで、永遠の目で見ることが大事だと学びました」と晴れやかな表情を見せる。同じカンパニー※7だった細谷美涼姉妹(高3)も家に帰って、このこと

がなぜ自分に起きたのか、神様の御心は何だったのかを主に尋ね求めた。聖文研究を通して「神様は何の目的もなく苦しみを与えるはずがない」と悟り、「御心に従うしかない」と心を定めた。もう会えないと思っていた友人たちが笑顔で彼女を取り囲む。「再会の喜びは一生忘れません」と感謝で締め括った。川辺幸姉妹(高3)も、とてもつらい思いを経て参加したが、主を信頼することで、不安な思いは平安に変わって楽しく過ごせたと証する。

林愛実姉妹(高1)は、4日目に発熱して隔離され、カンパニーの誰とも会えず、その日に迎えに来た父親とともに帰宅した。「ここに集っている人の気持ちがよく分かります。」別れは本当につらかったが、帰宅した後、仲間たちがLINEを通して支え続けてくれた。救われる思いだった。

カウンセラーだった姉妹は、「最後まで経験させてあげられなかったことが悔しくて、泣いて別れました」と当時を思い返し、この日の青少年の証を聴いて「そんな思いをしていたんだ」とまた涙を流した。

チャンスを求めて祈っていた

爆発的な勢いで感染を拡大した第7波などの影響を受け、多くの青少年が涙を吞んだ。長田陽向兄弟(中2)は開催2日前に弟が感染し、濃厚接触者となり参加を断念した。すごく楽しみにしていたので、心が揺らぎ、絶望感で苦しんだ。「落ち込んだり上がったり、気分の変化がしばらく続きました。その度に『チャンスをください』と祈りました。」一方で、自分がふさわしくないからかとも思い、「誰よりも早く起きて、聖典を読み、自分なりにできる努力をしてきました。」彼は短い日程を濃厚に過ごし、全身で楽しんでいる。

御木本愛実姉妹(高1)は、でき得る限



fsy2022 Special Session

JUST
THE
RD
頼する-

ローカルページ

りの予防をしていたが、直前に妹の風邪がうつってしまい、参加できなくなった。気持ちが下向きになり、良い表情をしてfsyから帰って来た仲間を複雑な思いで見ているという。ある日、「霊的な経験をしたんです。わたしも行けますよね」と祈ったら、「行けるよ」と感じた。特別セッションの日程と部活の試合が重なってしまったときも祈ると、また心に聞こえる。「行けるから、先生に言いなさい。」厳格な先生がまさか、と思ったが快諾してくれた。

身を乗り出して、仲間を示された奇跡に耳を傾ける青少年たち——。ある姉妹はコロナに感染し、自宅をひたすらfsyの動画を見ていた。それだけでも御霊を感じたが、参加できず悔しい思いもしていた。特別セッションの開催は「主を信頼してずっと祈っていたから、奇跡が起きたのだと思います」と確信する。その後も、人知れず叫び求めた祈りを聞き届けてくださった、との証言が続いた。

「作用する者」になると決意する

もりむらみゆう
森村美優姉妹(高1)が集う支部には若い女性が2名。若い男性はおらず、青少年の集まりを経験したこともなかった。ゴルフ選手を目指す美優姉妹は、聖餐会にだけ出席し、すぐ練習に向かうという生活を送っていた。若い女性会長に勧められ、勇気をもって参加した。「こんなに同じ世代の女の子がいるんだ!」足を踏み入れ、世界観が大きく変わった。仲間からの愛を感じ、教会員であることを誇りに思い、多くの決意をした。

同じカンパニーの教会員でない若い男性(高3)からも、たくさん学んだ。彼は初めて聞く教会用語を理解しようと、「あれは何?これはどういう意味?」と仲間尋ねる。彼は証会のことを、「誰もがまっすぐに

自分の思いを話していて、それを皆が聞いてくれる。学校では、そんな経験はこれまでになかった。友人もできて、これまでの人生の中で最高レベルの経験でした」と表現し、最後に皆で歌った歌を、「ぼくの大切な思い出」と愛おしむ。教会員でない彼が、別れ際に人目をはばからずに泣く姿に、仲間たちは心を揺さぶられたという。

美優姉妹は帰宅すると、進んで教会員であることを周りの人たちに伝え、知恵の言葉についても一から丁寧に説明するようになった。教会についての知識を増やすため、若い女性の集会や宣教師との会話から積極的に学んでもいる。同行した母親は娘の変化を喜ぶ。「優しくなりました。何度も愛していると言ってくれます。」母親自身の祈りもかなえられたと感謝する。

むらかみありさ
村上愛咲姉妹(高2)は、部活の日程がfsyと重なり、落胆した。「これまで安息日やセミナーも頑張り続けていたのに。」気持ちがふさぎ、信仰が揺らいだが、それは長く続かなかった。「これまで何度も御霊を感じた経験があり、心が温かくなる感じをまた味わいたいという願いもあったので、平安を取り戻したいと思いました。」負の思いは捨て、そこに留まるのをやめた。「皆の証を聴き、信仰を強め、霊的な経験をしたいという、求めたものが得られました。」愛咲姉妹は満たされた表情を見せる。

やぎせんのすけ
矢崎千之助兄弟(高2)が8月に参加しなかったのは、fsyがどういうものか分からず不安だったからだ。「これからは、与えられる者から与える者になりたいと思います。心に感じたことは主から与えられたものだから、小さな証であっても、誰かがその証を求めていることがあると思います。」帰ったらまず、ワードの青少年に経験を共有するつもりだ。ささきあきら佐々木明良兄弟(高3)は、霊的なものを求めて参加した。明良兄

弟は自然に御霊を感じている経験を喜び、もっと御霊を通して何かを得るにはどうすべきか考え続けた。「やりたいことができませんでした。自分のすべてをかけて、イエス・キリストへの信仰をもって行動してみようと思います。」すべてをかけてこなかったことの悔いと、すべてをかけるものを求めていた自分を発見して、本気の表情を見せた。

病気で入院していて8月のfsy参加を見送った若い女性(中2)もいた。願いがかなわなかった無念さや病気で苦しむ娘を見て、両親も胸を痛めていたところに届いた特別セッション開催のニュース。心身の調子はまだ万全ではなかったが、本人たつての希望で参加を決め、両親も同行した。「子どもの体力、親の都合を考えても、ぎりぎり可能な日数」の開催は本当にありがたかった。「皆と一緒に行動できないこともあったので心配しましたが、カンパニーやカウンセラーに温かく迎え入れられ、溶け込んでいるのを見て、安心しました。」遠くから見守る両親の瞳が、時折、涙で潤んだ。

癒され、強められた3日間

誰もが目的をもって自分の意思で参加し、「主を信頼する」ことを学んだfsy。8月は新型コロナの第7波、今回は大型で猛烈な台風14号の列島縦断が重なった。最後まで参加できるよう、実行委員会は万一のための宿舎や食事の確保に奔走する。あるカンパニーでは、台風の影響で帰ることになった若い女性のために、仲間たちが心を合わせて「最後までいさせてください」と祈った。その頃ニュースでは、コースが少し外れたことで台風の勢力が弱まり、最悪の事態が回避されたと報じる。最終日まで参加できると知った青少年は手を叩いて喜び、こぞって証をした。

fsy2022

仲間たちと霊的な3日間を過ごす中で、主の御心の全貌がようやく見えてきたと語る細谷美涼姉妹。「皆がこの特別セッションを待ち望んでいたことを強く感じました。自分たちの経験が必要だったこと、それが神様の大きな計画の中にいたことを知りました。神様はすべての子供たちを愛しており、もっと多くの人の救いの業

を行うことを望んでおられると知りました。」永遠の目で見ると、人生を力強く歩める——その通りだと知った。

青少年の心が癒され、強められていくのを目にした3日間。カウンセラーや大勢のボランティア、委員会にも慰めと喜びが広がった。傍らに座り、耳を傾け、愛情を込めて見守り続けた和田長老と直美姉妹の

メッセージは、青少年の心の中で膨らみ、絶えず彼らに語りかけている。4年ぶりに開催された fsy2022、次の機会を待ち望む声がもう聞こえている。

「皆さんの人生における壊れたもので、イエス・キリストの癒し、贖い、能力を授ける力が及ばないものは何一つないと証します。」**◆

今月のNews Headlines

● ニュースルームはこちら!

<https://news-jp.churchofjesuschrist.org>



- アイリング管長、スティーブソン長老からの特別なメッセージ—日本の教会の成長について語る 7月27日リリース
- 3つの神殿会長会、神殿参入を勧める—定期的な神殿参入が末日聖徒を強める 7月28日リリース
- 広島ステーキ柳井ワードにて新教会堂の奉献式とオープンハウスが行われる 7月29日リリース
- 日本のユースがfsy2022に参加—東京北・札幌、福岡・神戸、愛知・美浜のセッションに930人以上のユースが集まる 8月23日リリース
- 2022 fsyのハイライト 8月28日リリース
- 末日聖徒と地域社会をつなぐ献血活動—東京ステーキの浦和ワードは、地域社会への奉仕を愛する伝統を守り続けている 9月15日リリース
- 「自分が何者なのかを知る努力を」とベドナー長老がアジア北地域の聖徒らに勧告 9月27日リリース
- 集会和オンラインのリソースを用いて一致を楽しむYSA—2022年のYSAカンファレンスが9月と10月に3つのロケーションで開催 10月1日リリース
- アイリング管長とスティーブソン長老のインタビュー—2022年7月2日 東京 10月17日リリース

※上記リストは日本発信または日本に関連する記事のみです。海外発信記事(日本語)も数多く配信しています。

役員の変動

2022年7月21日から10月16日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

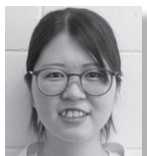
- | | | |
|--|---|---|
| ● 北海道南ステーキ 苫小牧支部
会長: 小林 雄仁 | ● 松戸ステーキつくばワード
ビショップ: Cade C. Bushnell | ● 京都ステーキ城陽ワード
ビショップ: 長 鷲 勇助 |
| ● 北海道南ステーキ函館ワード
ビショップ: 藤島 健 | ● 東京西ステーキ甲府ワード
ビショップ: 柳田 揚啓 | ● 日本大阪ステーキ
第一顧問: 辻本 豊
第二顧問: 高橋 謙司 |
| ● 日本東京北伝道部
第一顧問: 田淵 裕哉
第二顧問: 森田 康貴 | ● 神奈川ステーキ藤沢ワード
ビショップ: 佐藤 聖志 | ● 日本高松地方部
会長: 村野 知
第一顧問: 姉川 淳夫 |
| ● 北海道南ステーキ釧路支部
ビショップ: 菅野 雄次 | ● 名古屋ステーキ犬山ワード
ビショップ: 木村 真崇 | ● 広島ステーキ徳山ワード
ビショップ: 井川 仁人 |
| ● 北海道南ステーキ千歳恵庭ワード
ビショップ: 清水 豊 | ● 日本東京南伝道部
第一顧問: 坂井 信行
第二顧問: 富真 健一 | ● 日本神戸伝道部
第二顧問: 青葉 拓馬 |

専任宣教師

● 上から氏名、任地(伝道地)、出身ユニット、MTC入所日/着任日



いしかわ 創平
福岡伝道部
仙台ステーキ
長町ワード
2022年7月25日
プロボ MTC 入所



たのうち のぞみ
札幌伝道部
岡山ステーキ
米子ワード
2022年8月15日
プロボ MTC 入所



つちや 龍聖
福岡伝道部
名古屋ステーキ
津支部
2022年9月5日
プロボ MTC 入所



はやせ 恵真
神戸伝道部
東京西ステーキ
八王子ワード
2022年9月5日
プロボ MTC 入所

*宣教師の方は着任の前後に写真と情報を所定のウェブフォームからお送りください。

皆様の情報をお寄せください

会員の皆様の身近な話題をご紹介します

◎『リアホナ』日本語版編集室

〒106-0047 東京都港区南麻布5-8-8
TEL. 03-4545-3100 (代)

電子メール:

JPNLiahona@churchofjesuschrist.org

◎国際機関誌『リアホナ』のお届け、

その他商品に関するお問い合わせ——

教会配送センター

TEL. 03-5668-3391

FAX. 03-5668-3392

神殿・家族歴史を沖縄の人々に

教会がスポンサーとなるラジオ番組
「あなたとニー（根）コネクト」

仕してきた。ステーキコミュニケーションディレクターの西銘正^{にしめただし}兄弟はこう証する。「ラジオ番組の始まる初日……祈りをささげたとき、これまでにない力強い主の御霊がわたしの体を包み込みました。主が公共の電波を利用して、進んですべての肉なるものに知らせようとしていることが力強く分かりました。」



家族歴史フェアの告知をする安里兄弟

番組名に込めた思い

「あなたとニーコネクト」の「ニー」とは沖縄の方言で「根」を意味する。植物が大地に根を張るように、わたしたちも各々の暮らす土地に根を張り、多くの人と繋がっている。「根」は過去、「幹」は現在、「枝葉」はわたしたちが繋げる未来——番組名にはそんな思いが込められている。

世界有数の大高木、セコイア。ところが、その根はわずか1.2メートル程だという。地中で互いの根を絡ませ、支え合い、強め合うことで、高く、強く伸びていくことができる。「ファミリーサーチはセコイアの木のように」と安里兄弟は番組内で言う。「まさに家族、親族、先祖〔が〕お互いの根、『ニー』ですね。『ニー』をしっかり絡ませて、互いに支え合い、助け合う。……（それが）幸福生活を送れるように助け〔てくれ〕る、すばらしい鍵の一つだと思います。」◆



ラジオ沖縄でのスタジオ収録風景

沖縄にて現在、教会コミュニケーション部が提供するラジオ番組を放送している。ラジオ沖縄、10月1日から年末までの毎週土曜日、夕方17:45～18:00の「あなたとニー（根）コネクト」と題するコーナーだ。末日聖徒イエス・キリスト教会の紹介を目的とするこの番組は、最近放送された全国のラジオ番組を検索できる「radiko」（ラジコ）というアプリで聴くことができる。

チャリティ番組への協賛から

昨年12月のクリスマスシーズン、ラジオ沖縄では、「目の不自由な方へ音の出る信号機を」をキャッチフレーズに「ラジオ・チャリティ・ミュージックソン」という番組を放送した。教会は協賛を申し出て、沖縄ワードの教会堂がチャリティ番組の中継現場・募金拠点として活用された。

その経緯を踏まえ、翌2022年1月、沖縄ステーキ会長らがラジオ沖縄を表敬訪問した。その際、教会の神殿・家族歴史活動等について紹介したところ、社長直々に、「タイアップしてラジオで放送しましょう」との提案を受けた。こうして、教会提供のラジオ放送が実現したのである。

神殿に向けて—家族の歴史を紡ぐ

沖縄神殿の奉献を控え、10月の放送では、「家族歴史、先祖の探求」をテーマにファミリーサーチの紹介が行われた。*1 教会と同じく沖縄は、先祖や家族のきずなを重んじる土地柄だ。「家族」という言葉

には亡くなった先祖たちも含まれる——出演した普天間ワードの安里吉隆兄弟^{あさとよしただ}は番組でそう語る。

太平洋戦争で多くの尊い血が流された沖縄。沖縄神殿は「特別な供養の儀式を執り行う建物」であり、「神殿・家族歴史活動を通じて、それらの人々の霊を供養する、あるいは真に慰めることができます」と話す安里兄弟。成功や喜びだけでなく苦難や試練、それらを乗り越え、命を紡いできた先祖たちへの愛と敬意、感謝を込めて取り組むのが神殿・家族歴史だと、親しみやすい語り口で説明していく。

教会ではまた、家系図作成に留まらず、家族の思い出、先祖たちの生き様を、写真や音声といった形で記録していく。そのツールとして大きな力となるのがファミリーサーチであり、教会内外の誰もが無料で使える。安里兄弟がそう案内すると、音声のプロである女性アナウンサーは「いいですね」と共感する。番組内では、10月22日に那覇ワードで開催される家族歴史フェアの告知も行われた。

すべての肉なるものに知らせる

神殿のオープンハウスを前に、沖縄ステーキコミュニケーション評議会では、「主なるわたしは、これらのことを進んですべての肉なるものに知らせよう」*2の聖句を念頭に、沖縄中の人々がファミリーサーチを知り、活用してくれることを目標に掲げている。評議会のメンバーは、各々の賜物や知識を最大限に生かして奉

*1—11月は「教育・人道支援活動」、12月は「キリストの愛を分かち合う」をテーマに放送予定

*2—教義と聖約1:34

安息日がもたらすもの
— Blessings of Sabbath

仕事よりも大切なもののために

日曜定休のイタリアンレストラン「L'Albero (アルベロ)」の軌跡——大阪ステーキ御坊支部 こぼう 木戸地直紀兄弟 きとじなおき

和牛モモ肉のステーキと前菜盛り合わせ
店内の椅子は60年ほど前にイギリスの教会で使われていたもので
椅子の背の箱は賛美歌入れ (右写真)



和 歌山県御坊市の街並みが夕闇に沈むころ、日高川沿いにあるイタリアンレストラン「L'Albero (アルベロ)」*1にオレンジ色の明かりが灯り、夜営業が始まる。にぎやかにテーブルを囲んでピザを頬張る家族。顔を寄せ合ってデザート相談をしている老夫婦……。奥の厨房でシェフとして腕を振るうのは店主の木戸地直紀兄弟。「アルベロ」は御坊の街の人々に二つの特徴で知られている。一つは、本場イタリアに留学したシェフの質の高い料理。もう一つは、飲食店には珍しい「日曜定休」のレストランであることだ。

花の都フィレンツェで見た夢

「アルベロ」を開業する6年前、直紀さんはイタリア料理を学ぶためにトスカーナ州フィレンツェにいた。彼は当時教会員ではなかったが、同行していた妻の美也子姉妹は幼い頃に家族で改宗し、イタリアでも教会に集いたいと考えていた。教会の場所を調べたものの地図が分かりにくい。現地の宣教師とコンタクトを取りたいと願っていた矢先、「あれ宣教師やない？」美也子姉妹が駅の雑踏の中で黒いネーム

タグをつけた姉妹宣教師を見つける。

直紀さんが教会員ではないことを知った姉妹たちは「少し話してみない？」と長老宣教師たちを紹介してくれた。ところが当日、直紀さんは訪問の約束を忘れてすっぽかしてしまう。帰宅してから美也子姉妹に事の次第を聞かされ、直紀さんは謝罪のために長老たちに電話をした。「ごめんなさいって話をしていたら、なぜか次に会うときにレッスンを聞くことになっていました。」

後日開始されたレッスンは美也子姉妹の通訳のもと、英語で行われた。福音を学ぶ直紀さんの心には常にひとつの戒めが引っかかっていた。「知恵の言葉」である。イタリア留学を決めた際、料理と同時に

にワインとコーヒーについて学びたい気持ちがあった。「教会員になるとお酒もコーヒーも飲めない。勉強してきた目的のうち2つがなくなると思うと、かなり悩みました。」——レッスンの度に、英語もイタリア語も分からない日本人に心を込めて教えてくれる長老たちの熱意を感じた。その思いに応えたい気持ちはあるものの、バプテスマを受けたら留学の目的はどうなってしまうのか……二つの気持ちの間で振り子のように揺れ動く毎日。さらに、出産のために帰国する姉妹の出発日が3週間後に迫っていた。

焦りながらも結論を出せない直紀さんは、ある晩、夢を見る。

「イエス様がこちらに向かって立っている夢でした。白い衣を着ていて、何か話したわけではなかったんですが目を覚ました後になぜか、バプテスマを受けてもいいのかもしれない、という気持ちになりました。」

それから直紀さんは深く考え、決断する。「姉妹のお腹にいた息子のことを考えました。彼が教会に行くようになったときに、姉妹一人が連れて行くのではなく夫婦が揃っていたほうが絶対にスムーズに



イタリア留学先の仲間たちと

木戸地兄弟が留学したイタリアのフィレンツェ



木戸地ご夫妻



厨房で腕を振るう木戸地直紀シェフ



広々とした店内

福音を受け入れられるなど。」— 2010年11月21日、直紀さんは美也子姉妹とイタリア・フィレンツェワードの会員たちに見守られながら、バプテスマの水に入った。

突きつけられた現実

2011年3月、直紀兄弟はイタリアから帰国し、開店資金を貯めるために働き始める。だが、飲食業界で安息日の戒めを守る難しさを早速、痛感することになる。帰国して最初の店では基本、日曜日は休めず、休みが日曜日と重なったときだけ教会に行くという生活だった。「自分が安息日の戒めに重きを置いていないことに気づいて、その部分でちゃんと教会員できてないな、ってもやめました。」

次の店の面接で直紀兄弟は、勇気を振り絞り、「教会員なので、日曜日は教会に行くために休ませてください」と申し出るも、返答は「ダメです。」……日曜日を休むハードルの高さにひるんでいると、留学前に世話になった店のオーナーが声をかけてくれた。日曜日は夜営業のみの店を紹介され、聖餐会には毎週出席できるようになった。それでも戒めを守っているという実感は得られなかった。「教会に

行ってはいても、働いている時点で完全に安息日の戒めを守れているわけではない。中途半端だなんてずっと思っていました。」安息日の戒めを完全に守りたい一心で漬物店に勤めたこともあった。日曜日には休んでもいいという条件だったが、オーナーから「繁忙期には日曜日も出てほしい」と声をかけられ、休むことを歓迎されてはなかった。

こうした状況の中で、彼は真剣に独立を考えるようになる。自分が店主になれ

うと思いました。それに、これだけダメと言われたら、逆に絶対、日曜日休んでやる！という反骨心みたいなものも生まれて(笑)。——紆余曲折を経て、2016年6月7日、イタリアンレストラン「アルペロ」はオープンした。

強い決意をもって開店にこぎつけたものの、その滑り出しは兄弟が予想していたものとは違っていた。

「毎日お店で忙しくしている自分を想像していたんですけど、お客さんが全く来ない日も普通にありました。」ランチタイムになっても客席に人影がない状況に、焦りが募っていく。時折かかってくる貴重な予約の電話を断ることも辛かった。「日曜日はお休みなんです」と告げるたび「えっ日曜日ってやってないんですか?」怪訝(けげん)そうな相手の声が胸に刺さる。

飲食店の営業は通常「平日の赤字を土日で取り返す」のが定石とされる。真

アルペロ(木)の名前の通り店内は観葉植物で彩られている



ば、どのお店に行っても制約を受ける日曜日を自由に休めるという思いからだった。もともと30歳までに店を出したいという目標があり、独立について姉妹に相談すると「安息日が守れるならえんちょう」と支持してくれる。だが、「日曜日に休業するレストラン」について周囲の反応は厳しかった。身近な人から仕事で付き合いのある人まで、あらゆる人が反対し、意見した。飲食店が日曜日の営業をしないとどれだけの利益を失うことになるか。日曜日なしでやっていけるほど、レストラン経営は甘くないよ……と。

予想以上の逆風にたじろいだものの、直紀兄弟の信念は揺るがなかった。「最初は悩みましたが、自分のお店を持つのに人の意見で経営方針を決めるのは違

市内中央を流れる日高川沿いの眺めのいいお店



逆の方針を貫く「アルペロ」の経営はなかなか安定しない。しかし、直紀兄弟が日曜休業の方針を変えることはなかった。「日曜日を休むことでできた家族の時間を大切にしたいですし、せつかく聖餐を毎週取ることの大切さを感じるようになったのに、少しでも休んでしまうとその気持ちが薄まってしまわないかと思いま

安息日がもたらすもの —— Blessings of Sabbath



木戸地ご夫妻と子どもたち

した。」安息日を守りたい。その思い一つで綱渡りのような日々を耐えていた。

差し伸べられた主の御手

オープンした翌年の春先。閉店後、帳簿をつけ終えた直紀兄弟は通帳を眺めていた。明かりのほとんど消えた店内で、じわじわと減っていく残高に目を凝らしため息をつく。ここ数か月の売上はずっと、店を続ける指標となる損益分岐点を超えられていない。「アルベロ」の存続は危うかった。「自分が店主なので相談できる人もなくて、どんどん気持ちが落ち込んでいきました。」売り上げを増やすためにどこを変えて何をすればいいのか。いくら考えても答えは出なかった。

数日後、昼営業中に店の電話が鳴る。かけてきたのは美也子姉妹の友人。近くの看護学校に通っているという彼女は電話口で直紀兄弟に告げた。「今度、卒業生のお別れ会をアルベロでやりたいんだけど……60人くらいで！」

「一瞬、声が出ませんでした。」——願ってもない申し出だった。

3月の終わり、看護学校の生徒たちのお別れ会が「アルベロ」にて盛大に行われた。店を埋めた学生たちが直紀兄弟の料理に舌鼓を打つ。互いに名残を惜しむ賑やかな声を厨房で聞きながら、彼は感謝の気持ちでいっぱいだった。「今回のようなことはとても自分の力だけでできることではないので、『主の力が働いた』ということを強く感じていました。」

それからも奇跡は続いた。「経営が苦しいな、ちょっと厳しいな、と思うときに必ず何かが起こるんです。ちょっと大きい団体さんの予約が入るとか。それでその月を持ちこたえられたことが、何回もありました。」——やがて、御坊の街でアルベロ



テイクアウトのピザとホットドッグ出張販売車

の存在が知られるようになるにつれ、広い店内に目を付けた団体での貸し切りの依頼が定期的に舞い込むようになる。歓送迎会、結婚式の二次会、同窓会……多くのイベントをこなすうちに、少しずつ経営は安定していった。

新型コロナ禍の試練の中で

2020年、経営も軌道に乗ってきた「アルベロ」を新たな試練が襲う。新型コロナウィルスの感染拡大である。外出自粛の波は御坊市にも押し寄せ、春先の貴重な収入源だった歓送迎会の予約がゼロになる。直紀兄弟は休業も検討した。「でも開け続けていなければ、ますますお客さんが離れてしまうと思いました。」

直紀兄弟は状況を打開すべく、テイクアウト営業に踏み切る。電話で予約を受け付け、通常営業の傍ら持ち帰り用のピザを焼いた。テイクアウトを始めるのと前後して、直紀兄弟は「アルベロ」の営業時間を変える。テイクアウトの受け渡しを19時までにし、終わった時点で夜営業の客がいなければ閉店することにした。

突然早く帰宅するようになった父親の姿に子どもたちは驚き喜んだ。「あっパパが帰ってきた!!」玄関に飛び出してくる姿がうれしかった。

「それまでのほくは、安息日を守っていても、平日はずっと店に入り浸って常に頭の中はお店のことでいっぱいでした。コ

ロナを通じて家族との時間を多く持つことができ、家族により気持ちをシフトすることができるようになったことは、ほくにとって大きな祝福でした。」

手探りで始めたテイクアウト営業も、常連さんたちの熱心な後押しのおかげで軌道に乗り、多い日には30枚ものピザを売り上げた。「皆さんから『この店をつぶすわけにはいかない』という強い気持ちを感じて、本当にありがたかったです。」

2022年9月10日。土曜日のアルベロの店先に「本日臨時休業いたします」の張り紙が掲げられていた。同じ頃、直紀兄弟は京都ステーキ茨木ワードで、十二使徒のデビッド・A・ベドナー長老の話に耳を傾けていた。数年前は、教会のために土曜日に店を閉めることなど想像もつかなかった、と直紀兄弟は振り返る。その変化の中心には、試行錯誤して安息日の戒めを守り続けた日々がある。「日曜日をずっと休み続けたことで、ほかの曜日も休んで教会の行事に出席しようという思いを持てるようになったと思います。」

今、兄弟はもっと家族との時間を持つ店の経営を模索している。

「飲食業界は拘束時間が長い分、つい売り上げだけにフォーカスするようになってしまったりするんですが、そこを気にしなくなって、家族だったり教会だったり、仕事よりも大切なもののために仕事をしているんだと思えるようになりました。それは日曜日を休みにしたことで生まれた気持ちの変化だと思います。これからも家族を大切にしながら、皆さんに喜んでいただけるお店を細く長く続けていきたいと思っています。」◆